

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第8号】
令和3年
1月20日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

「給食育」



学校給食課長 勝又雅彦

近年、食育という言葉聞く機会が増えてきましたが、食育とは食事の栄養バランスを整えるためだけのものではありません。学校給食にも導入されている「食育」。そんな食育について「給食はどのような役割を果たしているか」について私見を述べたいと思います。

現在では、各家庭の食習慣が多様化しており、外食が広まる中で、栄養の偏りや生活習慣病の若年化が進み、子供たちの心身のバランスの取れた成長にも影響を及ぼしていると思います。

このような中で、学校給食は、子供たちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けるために重要な役割を果たし、色々な学びを提供しています。

洗いの指導や配膳の準備をすることや衛生面での習慣を身に付けています。また、配膳から片付けに至る作業を共同で分担して行うことにより、奉仕や協力の気持ちを体験的に学んでいると思います。

給食を食べる時は、学級の中で班ごと食べたり、学校によつては全校生徒がランチルームで一斉に食べたりすることで、仲間と一緒に食べる楽しさを味わっています。給食を食べた後は、一斉に歯磨きを行い、虫歯予防の大切さも学びます。

また、毎年一月に実施している学校給食週間において、子供たちは学校給食の歴史や役割を学び、さらに御殿場産の食材をはじめ、給食を作っている調理師への感謝の気持ちを持つことなどを学んでいます。

学校給食は、当市の教育重点目標の「豊かな感性、確かな知性、健やかな心身」達成のためにも、果たすべき役割は大きく、子供たちは栄養バランスがとれ、愛情という調味料がたくさん入った給食を食べ、社会性や望ましい食習慣など様々なことを学んでいます。

このことはまさに「食育」いや「給食育」だと思われれます。給食における食育は、関わる全ての人が、自分たちが毎日食べたたり作ったりしている食事に関心を持つことが重要です。食材を生産している人も、給食メニューを考える人も作る人も、学校の先生も、そして一人の人間が自分事として考えられるようにしていく必要があると考えます。

談してきてくれたことが強く伝わってきました。さて、今年度、教育委員会の立場として就学支援に携わっていく中で、ふと、初任当時の私の就学支援の姿勢を思い出しました。

今年度の就学支援から
学校教育課 山路崇仁

今年度も各園・校において保護者との丁寧な相談の上、適切な就学支援を進めてくださり、本当にありがとうございました。専門調査の同行で各園・校を訪問させていただき、保護者と話をしている中で、先生方が本人や保護者の思いに寄り添い、親身になって相

当時の私は、子供や保護者との面談の中で「授業中に寝てしまおうと困るよね。もう少し色々なことに興味を持って臨めるといいね。」「集団の中で話を聞くことが苦手なので、行動が遅れてしまいます。早く行動できるようにするといいですね。」「床で寝転がってしまうので危ないです。そうならないようにしたいですね。」など、学校での子供の表れと私の思いを本人や保護者に伝えていました。しかし、今

になつて振り返ってみると、子供自身は全く困っていない、保護者からすると「困っているのは先生ですよ」という思いになる言葉ばかりなことに気付きました。そうです。困っていたのは子供でも保護者でもなく、「私」自身だったのです。「私の困り感」を「子供、保護者の困り感」と勘違いをしていました。恥ずかしいかぎりです。これを読んでい

る先生方に改めて伝えることではありませんが、「教師の困り感」は限りません。日頃から子供の様子をよく見て、本人や保護者と学校の様子や家庭の様子について何度も話をしたり、やりとりをしたりする中で、初めて本人や保護者の

教育センターだより

風

薫る

小林博之指導員

「一瞬の沈黙」

道徳授業における「一瞬の沈黙」は、ねらいに迫るための深慮の時間として大切にされてきました。

友達の意見に刺激を受けたり、先生の問い返しに心を揺さぶられたりすることで、「えっ」という捉え直しの時間が生まれ、子供たちは、問いに対してより一層真剣に向き合います。自分は、本当のところどうなのか、いくつかの思考要素を瞬時につなぎ合わせ、より深い解を見つけようとするのです。その時間は、濃密な沈黙考の時間であるといえます。御殿場小学校五年生の道徳授業では、この一瞬の沈黙が次のような学習展開の中で

思いを知ることができません。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大予防の観点から保護者と直接話をするのが特に難しかったと思いますが、これからも今年度同様、保護者との丁寧な相談の上、適切な学習支援を進めてくださいますようお願いいたします。

の思いを一生懸命に想像している様子でした。

先生の提案から二分ほど経ったとき、それまでがやがやとしていた教室が、しんと静かになりました。数秒の沈黙の後、一人の男子児童が手を挙げました。子供たちは、先生の目線の先にまっすぐに手を挙げる友達の姿を見付けました。同時に「おっ。」という声が上がリ、教室は拍手に包まれました。役割演技で児童が発した言葉は、たった五文字の短い言葉でしたが、その言葉には、級友たちを納得させる力がありました。それをきっかけに、他の児童からは「家族への思い」や「家族における自分の役割」について、踏み込んだ発言がされました。この沈黙を創り出した授業には、幾つものよさがありました。

第一に、子供の発言をじっくりと聞く教師の姿勢です。発言する児童に正対し、しっかりと聞くことで、どの子ども安心して自分の意見を発表していました。そして、その姿勢は学級全体で共有されています。

第二に、子供の反応を待つ教師の構えです。役割演技を

提案した後、先生は、二分以上も待ちました。授業後に「あれだけの長い時間、よく待てましたね。」と尋ねると、「必ず誰かが出てくると信じていました。」と話されました。学級づくりを通して築いてきた子供たちとの信頼関係が授業の基盤にあつたのです。

第三に、丁寧な子供理解と教材の吟味による学習指導過程の構想です。教科書の読み物教材を活用して、深い学びの授業を構想するには、やはり、教材の吟味と発問の工夫が必要です。教材を二〜三回読んだ程度では、児童の実態と教材の特質を押さえた発問の設定はできません。○児童の実態と問題意識を重ねながら読む、○学習指導要領解説の「指導の要点」に照らして読む、○教材中の道徳的価値の描かれ方や状況設定を分析的に読む等、十分な教材分析をした上での発問構成が必要です。近藤先生は、教材を丁寧に読み解き、発問の意図を明確にすることで、学級全体で問題意識を共有し、考え・話し合う活動を進めていました。

これらのよさに支えられた授業で、子供たちは問いを自分事として捉え、これまでの

知識や生活経験を生かしながら真剣に考えました。一人一人の意識の高まりは、学級全体の学びに向かう力となつて、沈黙が生まれたのだと思います。挙手をした児童について担任に尋ねると、「夏休みに母親が入院して、『家族』に対する思いを人一倍強く持っていたのではないか。」と話してくれました。

道徳授業では、学級全体での真剣な思考が新たな気付きを生み、個々の考えを深めます。しかし、活発な話し合い（議論）だけでは十分とは言えません。授業の中に一人学びの時間があり、これまでの自分を見つめ直し、次の自分へのステップとする自己内対話の時間が必要となります。

一瞬の沈黙は、主体的・対話的な学びの中で生まれます。授業中に沈黙ができる、慌てて先生が発問を言い換えてたり、説明を加えたりして、子供たちの思考を邪魔してしまう場面遭遇することがあります。投げ掛けた問いの力と、子供たちの真剣な思考を「信じて待つ」教師であってほしいと思います。その姿勢が、一瞬の沈黙を創造し子供たちの学びを深めます。